国指定史跡　唐津松浦（まつら）墳墓群

種別	国指定史跡
所在地	唐津市半田　Google Mapで表示 唐津市呼子町大友　Google Mapで表示 唐津市宇木　Google Mapで表示 唐津市桜馬場　Google Mapで表示
指定年月日	史跡指定：昭和41年（1966）12月19日 追加指定：平成26年（2014）10月　6日

概要

唐津松浦墳墓群は、すでに史跡として指定されていた葉尻山支石墓群に、大友遺跡、森田支石墓群、桜馬場遺跡の3遺跡を追加し、名称を変更した遺跡群のことです。

唐津には、弥生時代の遺跡が数多く存在しており、稲作が伝わった弥生時代のはじめから、古墳時代を迎えるその終わりまで、様々な形のお墓も見つかっています。唐津平野における墓の造り方の変遷、さらには北部九州における墓の地域性を知る上で重要な遺跡群であることから国の史跡に指定されています。

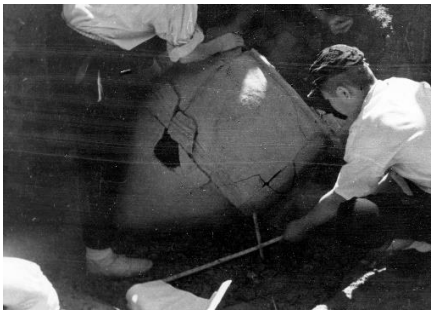
葉山尻支石墓群

葉山尻支石墓群は、鏡山の南に広がる平野を望む標高30mほどの小高い丘陵の北側緩斜面にあります。昭和26年（1951）にミカン園の開墾中に偶然発見され、支石墓としては国内で初めて学術調査を実施し、縄文時代晩期後半から弥生時代中期にかけての支石墓（しせきぼ）5基、甕棺墓（かめかんぼ）26基などが確認されました。

北部九州に多く分布する支石墓は、土壙墓（どこうぼ）や石棺、甕棺を埋葬した上に、数個の支え石で支えられた上石が覆いかぶさるように乗っています。葉山尻支石墓群の支石墓の上石は亀の甲羅のような形で、長さ2mほどの大きな花崗岩が使われています。

支石墓は朝鮮半島で普及したお墓の様式であり、朝鮮半島との交流によって異なる文化のお墓の制度が取り入れられたことが分かります。その一方で、上石の下には、弥生時代に北部九州で独自に発達した「甕棺」という朝鮮半島の支石墓には見られなかった組み合わせが採用されていくことから、大陸や朝鮮半島との交流の玄関口となった唐津地方において、稲作や金属器等の技術だけでなく異なる文化や習俗を受け入れ、独自の文化と融合させながら弥生時代の社会が発展していく過程を知る上で重要な遺跡です。

1号・2号支石墓



昭和26年の調査風景
（調査には地元学生も参加）

大友遺跡

大友遺跡は、唐津市呼子町大友の、玄界灘に面した砂丘の上に存在しています。弥生時代のはじまりから次の古墳時代かけての墓地で、昭和42年(1967)に海水浴に来ていた中学生によって発見され、平成16年（2004）にかけて9次の調査が行われています。

調査の結果、弥生時代のはじめに朝鮮半島経由で伝わった支石墓や土壙墓、甕棺墓、石棺墓(せっかんぼ)など210基を超える墳墓が確認され、ゴホウラやイモガイなど奄美や沖縄産と思われる貝を使った装飾品である貝輪が見つかっており、ここに埋葬された人々が朝鮮半島や南西諸島と広く交流を行っていたことをうかがわせます。

また、支石墓から発見された人骨は、いわゆる「渡来人」的な特徴ではなく、頬骨が低く平面的で、鼻が広くひろがる、「縄文人」的な特徴を持っていたことも注目されています。このように、大友遺跡は弥生時代の成り立ちを考えるうえで、貴重な遺跡といえます。

大友遺跡で発見された支石墓

大友遺跡出土貝輪

森田支石墓群

森田支石墓群は松浦川の東側、唐津平野を望む夕日山東麓の宇木に所在します。調査は昭和41年（1966）と平成7年（1995）、平成17年（2005）の3度行われています。

昭和41年の調査は九州大学とフランスのフランス極東学院との合同調査で行われました。この当時、日本の遺跡調査において、国外の研究機関が参加するというのはあまり例がないことで、国外の調査方法で調査を実施した貴重な例となりました。

森田支石墓群の3次にわたる調査の結果、16基の支石墓が確認されました。そのうち上石を除いて下部構造まで調査を行ったのは1・4・8号支石墓の3基のみで、他は遺構の保全を優先するため未調査のまま現地に保存されています。平成7年の調査の際に支石墓に隣接して、縄文時代晩期に造られたと考えられる壺棺（つぼかん）が出土しました。

支石墓は朝鮮半島から伝わった墓制であり、また壺棺は縄文時代以来の埋甕の伝統を引く墓制であることから、朝鮮半島から新たに伝わった習俗と日本列島固有の縄文的な習俗を混在させた独自の墓制で造営されていることがわかりました。このことから、森田支石墓群は弥生時代初期における社会構成を考える上で重要な遺跡であるといえます。

支石墓検出状況
(左より4号・3号・5号支石墓)

4号支石墓　上石取り外し
(右側3号・5号支石墓)

桜馬場遺跡

桜馬場遺跡は、現在の唐津市中心市街地の南西に位置し、かつては海岸線の後退によって形成された砂丘の南端部分に位置しています。太平洋戦争真っ只中の昭和19年（1944）、防空壕を造るために地面を掘っていたときに偶然発見された遺跡で、その際成人用の甕棺の出土が確認されました。

棺内には、大陸との交流を示す中国の後漢鏡（ごかんきょう）や国産の巴形銅器（ともえがたどうき）、南海産の貝から作られる貝輪を模した青銅製のブレスレットである有鉤銅釧（ゆうこうどうくしろ）など、大量の青銅製品が副葬されていました。これら青銅製品は、有力者の権力を示す「威信財（いしんざい）」とよばれるもので、その保有量と質から、この墓が当時の「末盧国（まつろこく）」の王墓と考えられています。

その後、昭和30年（1955）に日本考古学会と東亜考古学会共同で実施された発掘調査のほか、唐津市教育委員会としても、幾度もの調査を行ってきました。その中でも、平成19年に行われた調査では、王墓甕棺の正確な位置の把握に加え、巴形銅器や素環頭大刀（そかんとうたち）、ヒスイ製の勾玉（まがたま）、ガラス製の管玉（くだたま）などの副葬品の出土も確認されました。

現在、昭和19年（1944）に出土した資料は国の重要文化財に指定されており、平成19年（2007）の調査で出土した資料は、佐賀県の重要文化財に指定されています。

桜馬場遺跡出土甕棺

桜馬場遺跡出土資料

問い合わせ
生涯学習文化財課
〒847-0013　佐賀県唐津市南城内1番1号
大手口センタービル6階
電話番号：0955-72-9171